

## 超分節音とプロソディー：英語と日本語における対応

牧野 武彦

### 1. はじめに

標題の2つの用語はそれぞれ suprasegmentals, prosody という英語に対応するものであるが、<sup>1)</sup>通常我々はこの2つの用語を特に区別せず、同じ音声現象に対する総称として用いている。しかし、両者はそれぞれ異なった理論的枠組の下に成立した用語である。すなわち, suprasegmentals はアメリカ構造主義言語学の流れ(生成文法を含む)を汲むのに対し, prosody はロンドン Firth 学派に端を発する。<sup>2)</sup>その意味において、両者はたまたま同じ様な音声現象を指して用いられるが、本来は同一の文脈において使うことは出来ない。

小論では、両者の違いをこうした理論的背景の違いに矮小化せず、同一の枠組の中で重要な意味を持つ区別を与えることを提案したい。また、これを用いて、英語及び日本語のアクセント・イントネーションなどを共通の道具立てで扱える枠組みを作ることを試みる。

### 2. 機能的範疇としてのプロソディー

2.1 超分節音とプロソディーの区別については、これをそれぞれ形式と機能についての用語とするのが良いと思われる。すなわち、「超分節音」は音声学・音韻論的範疇を示し、「プロソディー」はこの超分節音が通常担っていると思われる言語機能、あるいはそういった言語機能を持った音声的・音韻的範疇を示すのに使おうというわけである。この区別では、プロソディーの方が一般的な用法からかなりかけ離れてしまう感じがするが、実際上は超分節音と同じ物を違った角度から見るとなるだけであることが予想されるため、それほど不便は生じないと思われる。

「超分節音」に属する音声・音韻的範疇につ

いては従来のものをそのまま踏襲することになるので自明であるが、では「プロソディー」に属する言語機能とは何であろうか。言語は一般に語彙と文法から成り立っているとされるが、「文法」を狭義の形式文法として捉えた場合、実際にはそれ以外の規定要因も存在する。殊に、超分節音を規定するものはこうした語彙・文法の枠に入らない部分が大いと考えられるので、これをプロソディー的機能と呼べば都合が良いと思われる。Bolinger (1989: 3) には、prosody と grammar を対立させているような記述 (“... the distinction is prosodic rather than grammatical.”) が見られるが、これに添った方向での区別である。

2.2 Makino (1991) においては、英語のイントネーションの機能について提案されてきた様々な言語的機能を検討したが、その機能についてプロソディーと非プロソディーの区別はまだ行っていなかった。これらの機能を小論における観点から少し見直しておく必要があるであろう。

Makino (1991) で扱った英語イントネーションの機能は、態度、情報構造、統語構造、発語内行為、談話構造、語の意味との調和、の6つであった。それぞれの機能が語彙・文法に属するか否かであるが、統語構造は当然ながら文法に含まれるが、態度、発語内行為、談話構造はかなり明白に語彙・(形式)文法の枠外に位置し、プロソディー的機能に属すると考えられる。

残る情報構造と語の意味との調和であるが、これは形式文法における意味表示がどのようなものであるかによるであろう。すなわち、情報構造については、例えば焦点が単なる「ここが焦点」というマーク付け以上の表示を意味表示において与えられているとすれば文法に属すると見なせる。語の意味については、かなり一般

化された意味素性にアクセント輪郭が対応しているとすればこれは辞書的と呼ぶには個別性が足りないため、語彙に属するとは言えない(すなわちプロソディーに属する)のではないか。いずれにしても断定は難しい。

次節では英語のアクセント・イントネーションについて、超分節音の範疇とそれに対する規定要因をプロソディー・非プロソディーの観点

から整理検討してみることにする。

### 3. 英語における超分節音とプロソディー

#### 3.1 英語のアクセント・イントネーション

を記述する枠組みにはほぼ確立されているものが幾つかあるが、超分節音とプロソディーを区別する観点からは、若干の整理が必要と思われる。次に例文にその範疇を重ね合わせて示す。

		Such	behavior	is	inconsistent	with	her	principles.	
語	強	1	w 1 w	1	2 w 1 w	1	1	1 w w	
文	強	1	1	0		1	0	1	
音	調								#
音	調			#					#
音	調								
ア	ク	1	w N w	w	2 w N w	w	w	3 w w	
ク	セ	L	FR		F				
セ	ン								
ン	ト								
ト	輪								
輪	郭								
郭									

語 強 勢 : 1 = 第一強勢, 2 = 第二強勢, w = 弱強勢  
 ア ク セ ン ト : N = 核 (第一), 1 = 第一, 2 = 第二, 3 = 第三, w = 弱  
 ア ク セ ン ト 輪 郭 : L = 平板調, FR = 下降上昇調, F = 下降調

これは、Bolinger (1986)を基盤にイギリス的な「音調群」の概念を加えた枠組みである。但し、筆者としてこれが英語のアクセント・イントネーションを記述するため最善のものであると必ずしも考えている訳ではない。あくまでも、このあとの議論のための試論であるから、従来の枠組みとの整合性を保つための調節は当然必要となってくるであろう。

3.2 では、これらの範疇について個別に解説する。まずは語強勢である。語強勢については、位置を分節音の並びや統語的範疇などに基づいて予測しようという試みがなされてきているが、これを換言すれば、語強勢を文法的に規定しようとしていることになる。但し、ある程度は個々の語の属性と見なさざるを得ない面もあり、その意味では辞書的に規定されるとも言える。すなわち、語強勢には文法的・辞書的機能があると考えられる。<sup>3)</sup>

但し、小論においてはここでの語強勢には音声の実体を認めないことにする。語強勢はアクセントがそこで実現されることが可能な「場」であり、分節音から成る音節が持つ属性である限りにおいて音韻的範疇とは言えるが、音声的にはアクセントが実現して初めて実体を持つも

のである。但し、段階については一般的な第一、第二、弱、の三段階を認め、このうち、第一と第二のみが通常強アクセントを受けることが可能であるとする。弱強勢を担う音節は、強アクセントを受けない結果、母音が弱母音として実現する。

3.3 文強勢は、発話の中でそれぞれの語が通常アクセントを受ける可能性があるか、という要素である。いわゆる内容語(上記で“1”とあるもの)はアクセントを受け、機能語(上記で“0”とあるもの)はアクセントを受けない、という形で、大体において語の(統語的)範疇から規定される。<sup>4)</sup> 語強勢と同様、音声の実体はアクセントに委ねられるが、強アクセントを受けなかった機能語はそれぞれ独自の形で弱化を起し、弱形という形を持つものはそれによって実現される。

3.4 音調群境界の位置は、発話を一般に音調群と呼ばれている単位に区切るものである。音声の実体としては、ポーズが入る場合もあるが、これは必須ではなく、直前でのリズム間隔の延長が主にこれを示すと言われる(東 1992: 58)。機能としては、発話を適当な情報単位に区切る、あるいは統語上の切れ目の大きさを示

す、という2つがあり、これらの要因に規定されるが、アクセントの位置との相互依存もあるものと思われる。

3.5 アクセントは、通常は文強勢のある語の第一・第二強勢を持つ音節に置かれる。音声の実体は段階によって異なり、第一アクセント及び第二アクセントではピッチが周囲の音節から上または下に突出し、音量も大きく、また長く発音され、母音は完全母音で音質がはっきりとしている。音調群境界の間では最後の第一アクセントが最も目立って聞こえるため、「(音調)核」と呼ばれ(上記で“N”とあるもの)、意味の焦点をなす。第三アクセントは核の後のみに現れ、ピッチの突出を持たないという点で第一及び第二アクセントと異なっている。<sup>5)</sup> 弱アクセントを受けた音節は音量が小さく、音長は短く、また母音が弱母音で現れるか、分節音の成り立ちによっては音節主音の子音となる。通常はピッチの突出はないが、音調群の最初の強アクセントの前ではピッチによる対立を示すこともある。

核は音調群内の最後の内容語の第一強勢に置かれるのが原則で、その限りにおいて統語構造の影響を受けていると言えるが、実際の発話では必ずしも最後である必要はなく、意味的に焦点を置く必要を話者が認めればそれ以外の内容語(inconsistentはその例)であっても文強勢を持たない機能語(is, with, her)であっても問題はなく、また特定の形態素や、メタ言語的に分節音(特に母音)・綴り字を強調したい場合は語の第一強勢以外の音節(inconsistentのin-など)に置くこともできる。<sup>6)</sup>

	ゆうじ	は	まもる	に	ビール	を	もらっ	た	
語アクセント	△◎	△◎	△	△◎	△◎	△◎	△	△◎	
結合アクセント	主	従	主	従	主	従	主	従	
区 切 り									#
プロミネンス	w1	w2	w1	w2	P	w2	w2	w2	
句 末 音 調									→

語アクセント : ◎=アクセント核, △=上昇アクセント

結合アクセント : 主=支配, 従=従属

プロミネンス : P=プロミネンス, w1=第一弱化, w2=第二弱化

句末音調 : →=無標

3.6 アクセント輪郭はアクセントが後続する音節を含めてどのようなピッチ曲線を描くかということである。いわゆる「イントネーション」は核の持つアクセント輪郭である。英語においては上昇・下降・下降上昇・平板調などがあり、どれを選択するかは陳述文・疑問文などという文の語用論的タイプ(発語内行為)や、談話構造、アクセントを受ける語の意味、話者の態度など様々な要因が関係する。但し、統語構造はほとんど影響を与えないと見られる。

3.7 以上が小論で認定する英語の超分節音の範疇である。それぞれのところでも触れたが、語彙・文法に支配されていると見られるのは語強勢と文強勢である。一方アクセント輪郭はこれらの支配は全く受けず、完全にプロソディーに属すると思われる。音調群境界とアクセントは両方の要素を含むが、実際の発話では文法によって規定されても強調などの(プロソディー的)要素によってそれが覆される場合が多いと思われる。

#### 4. 日本語における対応

4.1 ごく単純化して見れば、英語の語強勢には日本語の「(語)アクセント」が対応し、英語の音調核には日本語のいわゆる「プロミネンス」が対応すると見て良いであろう。また、英語のアクセント輪郭には日本語では句末の音調が対応すると思われる。<sup>7)</sup> しかし、これだけでは超分節音の点からも、プロソディーの点からも範疇が不足するため、以下で英語との対応を考慮に入れながら整理することにする。やはり次に例文を示したあと、個別に解説する。

4.2 語アクセントはその名のとおりに、辞書的に定まっている語の属性である。英語の語強勢に対応するが、これとは違いアクセント核を担うモーラの次でピッチが下がるという音声的実体を持つことは周知のとおりである。

但し、小論ではこれに加えて「上昇アクセント」というものも認めておくことにする。これはいわゆる平板式のアクセント型を持つ語の場合にも後述するプロミネンスを持つ場合に「アクセントが弱化せずに実現する」と規定したために認めることにしたものである。上昇アクセントは頭高型以外の語では第一モーラに存在し、その語のアクセントが弱化しない場合に次のモーラでピッチが上がる、と規定しておく。なお、頭高型の語では第一モーラの前にこの上昇アクセントがあると見る。

更に付け加えておきたいのは付属語のアクセントである。付属語のうち、従属型の単モーラ語の場合、その語自体のアクセントは問題にされないが、「『と』と言う」のような引用形を考えた場合、また、後述するプロミネンスにおける整合性から、これは平板型ではなく頭高型であると見なす方が妥当と思われる。

4.3 次は結合アクセントである。これは英語における文強勢に対応するもので、「通常の文の中でアクセントが弱化せずに実現するか」と言い表すことができる。日本語の付属語が英語の機能語に対応するものであることを考慮したものである。

但し、日本語の付属語の場合、文の中で自立語と結合した場合にむしろ自立語のアクセントを打ち消してしまう「支配型」のものや、「融合型」「不完全支配型」といったものもある(佐藤 1989: 234-235)ため、英語の機能語ほど単純ではない。また自立語でも、複合語を作った場合にアクセント型が変わる「反転型」というものがあり、英語のように語強勢のパターンが保存されない場合が多い。従って、現在のところ自立語では「保存型」、付属語では「従属型」と「不完全支配型」しか扱うことができない。当然今後の検討課題である。

4.4 次に区切りとプロミネンスである。それぞれ英語の音調群境界とアクセントに対応する。プロミネンス(英語の音調核に対応)を受

ける語はアクセント核がその区切り内で最も高く実現する。

プロミネンスを受けない場合、アクセントの弱化には2段階あり、第一弱化(w1)では上昇アクセントの幅が小さくなり、第二弱化(w2)ではアクセント核の下降が小さくなる。プロミネンスの前では第一弱化、後では第二弱化が起こることは英語と対応する。但し、区切り内の最終文節の場合は強調されても第一弱化、されない場合は第二弱化という点で特別である(郡 1989: 321-325)。また、平板型の文節の場合、第二弱化は上昇アクセントの消失という形で実現すると考えられる。

プロミネンスは通常自立語のアクセント上に実現するが、付属語に実現することもできる。単モーラの付属語の場合、平板型と中高型の自立語についたものはそこで一段とピッチが上昇し、尾高型の自立語ではピッチの下がり方が小さくなる。上の例では、「ゆうじは」の「は」、  
「まもるに」の「に」、  
「ビールを」の「を」、  
「もらった」の「た」は、それぞれの意味を強調したい場合には直前のモーラよりも高いピッチで発音してプロミネンスを示すことができるということである。<sup>8)</sup>

4.5 最後に句末音調である。句の最終モーラが平板で終わる(→)か、ピッチの上昇を伴う(↑)かの2つのみを認めておく。英語のアクセント輪郭に対応するものだが、実現場所が違う。英語ではアクセントを担う音節(およびその後続音節)であるが、日本語の場合は区切り内の最終モーラで実現する。

4.6 以上の超分節音がどのような要因によって規定されるかであるが、日本語についての検討はまだこれからではあるが、暫定的には英語とおおよそ対応すると見て良いであろう。すなわち、語アクセントは辞書的に、結合アクセントは辞書的・文法的に、区切りは情報構造及び統語構造に、プロミネンスは情報構造に、句末音調は文の発語内行為や談話構造、話者の態度などの諸要因、といった具合である。<sup>9)</sup>

これをプロソディー、非プロソディーに分類すると、語アクセント、結合アクセント及び区切りは非プロソディー、プロミネンス、句末音調はプロソディーということになる。区切りに

については情報構造とのかかわりからはプロソディーにも影響されていると見ることができる。また、プロミネンスについては、中立発話において最終文節が弱化するという事実から、最終文節には音声的なプロミネンスは通常来ないという形での「統語的」要素からの影響も同時にあるということもできよう。

### 5. まとめ

以上かなり図式的に議論を進めたが、未解決の部分もあり、また英語における範疇を規定した後に日本語をあてはめる形になったため、「英語の鑄型に無理に日本語を押し込もうとするものだ」という批判の余地もあるであろう。もちろんこれは今後の検討課題である。しかし、より大きな問題となるのは、§2で既に論じたように、プロソディー的機能と非プロソディー的機能の区別が容易なことではない、ということであろう。

ここで一つ付け加えておきたいことは、プロソディー的機能は何も超分節音だけが担うとは限らないということである。英語においてはアクセントが強か弱かによって現れる母音の種類が違い、弱アクセントでは母音弱化を起した弱母音が現れる。また、無声閉鎖音が帯気音として実現するか否かもこれによって規定される。もちろんアクセントを媒介としての現象ではあるが、これを分節音がプロソディー的要素によって影響を受けていると見るのはそれほど不当な見方ではないと思われる。

超分節音が専らピッチのみによって実現されている観のある日本語においては、こうした超分節音を介しての分節音のプロソディー的変異が起こっている可能性は低いが、郡(1989: 331-334)の観察に見られる、促音や撥音を加えて強調するという現象は、分節音が超分節音とは別に、独自にプロソディー的意味を付け加えていると解釈することもできよう。英語にももちろんそうした現象は存在するであろう。

このことが示唆すると思われるのは、仮に英語に話を限っても、母音弱化という分節音の音韻規則の構造記述にさえプロソディー的なものが入らざるを得ないのであって、現行の標準的な枠組みに見られるように音韻部門が統語部門

からの出力を音声的に実現させるためのものであるという見方<sup>10)</sup>には問題があるということである。

### 6. おわりに

1991年来日したDavid Brazil氏はJACETの講演で「プロソディーの使用は各言語に共通であり、教育上の問題も少ない」という主旨の発言をされていたが、氏の言うプロソディーが小論の超分節音ではなく、プロソディーに対応していることは明らかである。すなわち、例えば「強調」というプロソディー機能を担う超分節音が何かを習得すればそれをどこで使うか、という事はプロソディーである以上自明である、ということになる訳である。

もちろん、特定のプロソディーをどのように規定するかの問題があり、仮にそれが解決したとしてもそれに対応する超分節音をいかにして習得させるか、ということは従来そのまま残るわけである。しかし逆に言うと、「どのように発音するか」の部分に指導の焦点を合わせることが出来るようになるはずであるから、こうした枠組みによる分析がある程度進めば教育的にはかなり有用性があるのではないかと思われる。

理論的に見ても、殊にプロソディーに属する音声の部門は従来形式と機能を十分に区別できていなかった傾向があったが、この面を整理できるきっかけにはなるものと思う。また、超分節音を言語に属する「形式」と見なす以上、言語の意味機能に狭義の文法では扱いきれないプロソディー的なものが必然的に入って来ることを示し、これにより、言語研究の対象としての「意味」を論理表示可能なものみに限定することはできない、という筆者の「信念」に対する多少の論拠を提示したのもである。但し、この最後の点については別に改めて論じる機会が必要となろう。

## 注

- 1) 「韻律」という訳語を prosody に対してあてることもあるが、あまり一般的ではなく、また単に強弱のパターンを意味する meter と混同の恐れもあるため、敢えてカタカナ語にしておくことにした。
- 2) Couper-Kuhlen (1986: 2-4) が suprasegmentals と prosody の違いについて概略的に論じている。なお Firth 学派における prosody については Robins (1989: 149-59) も参照。
- 3) 「機能」という語をこのように使うことには違和感があるかも知れないが、ここでは「規定される」の意味も持つものとして議論を進める。すなわち、英語の function に対応する用語である。
- 4) もちろん実際にはそれほど単純ではない。詳しくは水光 (1985) を参照。
- 5) これはダウンステップというかなり普遍性を持った音声現象 (窪蘭 1992: 4) によるものであるとされる。
- 6) しかし、語中における選択の場合は必ずしも論理的に予想される場所にアクセントが置かれる訳ではなく、また論理的であっても全く制限がない訳ではない。Bolinger (1986: 92, 104) を参照。
- 7) 天沼・大坪・水谷 (1978) では、それぞれに「アクセント」「卓位」「イントネーション」という用語を与えている。
- 8) 但し、そうなった場合には区切りも変更される可能性が高いと思われる。すなわち、区切りとプロミネンスには相互依存があるということである。
- 9) 英語では「語の意味との調和」というものが存在したが、日本語の句末音調は語に起こるものではないので、当然対応しない。
- 10) ここでは Culicover and Rochemont (1985: 124) のようなものを想定している。

## 参 考 文 献

- 天沼寧・大坪一夫・水谷修. 1978. 『日本語音声学』 東京: くろしお出版.
- 東淳一. 1992. 「日本語の韻律体系」 桐谷・今石 (1992), pp. 53-62.
- Beckman, M. E. 1992. Intonational form and intonational function in Japanese and English. 桐谷・今石 (1992), pp. 187-196.
- Bolinger, D. 1986. *Intonation and its parts*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- . 1989. *Intonation and its uses*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- Couper-Kuhlen, E. 1986. *An introduction to English prosody*. London: Edward Arnold.
- Culicover, P. W. and M. Rochemont. 1985. Stress and Focus in English. *Language* 59: 123-165.
- 川上葵. 1977. 『日本語音声概説』 東京: 桜楓社.
- 桐谷滋・今石元久 (編). 1992. 『日本語音声の研究と日本語教育』 東京: 文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声」国際シンポジウム実行委員会.
- 郡史郎. 1989. 「強調とイントネーション」 杉藤 (1989), pp. 316-342.
- 窪蘭晴夫. 1992. 「新しい音声・音韻研究の展開」 『日本音響学会誌』 第48巻1号, pp. 3-8.
- . 溝越彰. 1991. 『英語の発音と英詩の韻律』 東京: 英潮社.
- Makino, T. 1991. English intonation and its functions. *Random* 16: 49-68. 東京: 東京外国語大学大学院英語英文学研究会.
- Robins, R. H. 1989. *General linguistics: an introductory survey*. 4th ed. Harlow: Longman
- 佐藤大和. 1989. 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」 杉藤 (1989), pp. 233-265.
- 杉藤美代子 (編). 1989. 『日本語の音声・音韻 (上)』 講座・日本語と日本語教育 3. 東京: 明治書院.
- 水光雅則. 1985. 『文法と発音』 新英文法選書 1. 東京: 大修館書店.

## Suprasegmentals and Prosody: Their Correlates in English and Japanese

MAKINO, Takehiko

In the general usage, the terms "suprasegmentals" and "prosody" are used more or less interchangeably. However, they can be fruitfully discriminated: "suprasegmentals" should remain phonetic/phonological categories and we can use "prosody" as a functional category. "Prosody" should be used for the linguistic functions not contained in lexis or grammar. This may sound a rather radical change in usage, but in so far as the uses of suprasegmentals are determined more or less outside the scope of formal grammar and lexis, "prosody" is surely to refer to more or less the same thing as before, but from a different viewpoint.

In English, word-stress (which syllables to be accented in a word) and sentence-stress (which words are likely to be accented in a sentence) are suprasegmental but clearly not prosodic, because they are determined lexically, (phonologically,) and/or syntactically. Intonation grouping, accent placement, and choice of accent profile are prosodic, because their choice is influenced by such factors as information structure, discourse structure, attitude, and so on, which are (at least currently) not generally handled in formal grammar.

The suprasegmentals in Japanese (word accent, combination accent, phrasing, prominence, and phrase-final tone) seems to roughly correspond to those of English if we consider them from a prosodic point of view, even though they are phonetically rather different.

(まきの たけひこ 英語学・音声学)

(1992年11月30日受理)